調査報告

フランス・ジュラ農村にみる移住者の増加と田園生活 —フランシュ・コンテ地域圏、カンティニ村の事例—

Repopulation and Rural Life in the Jura Region, France: Case Study of Quintigny,
Franche-Comté

市川 康夫・中川 秀一・小川 G. フロランス

ICHIKAWA Yasuo, NAKAGAWA Shuichi and OGAWA Genevieve Florence

(2019年2月7日受付 2019年4月13日受理)

現在、西ヨーロッパ農村では、都市から農村への人口回帰が進展している。本研究は、フランスの人口増加農村を事例に、農村移住者の田園生活はどのようなものであり、その背景には何があるのかについて、彼らの意識に注目して論じた。カンティニ村の移住者増加は、通勤・通学地としての都市との結びつき、静かな環境、手頃な土地価格、古い農村家屋や景観の美しさが背景にあった。移住者の多くは自主リフォームを好むため、公務員など時間に余裕のある人々であった。彼らは、立地や環境だけではなく、村に活気があることを高く評価していた。カンティニ村は、住民同士の地域内でのコミュニケーションを重視する一方、それを必ずしも強制しない点が特徴といえる。

Currently, Western European rural areas are experiencing population retrogression from cities to farm villages. Using a French rural village that has experienced population growth as an example, this study discusses the state of rural villagers' lives and background factors by focusing on their state of mind. The background growth factors behind people relocating to the village of Quintigny can be attributed to its commutability to the city for work/school, with the quiet environment, affordable land prices, old farmhouses, and other aesthetic features as background factors. Most of the relocated residents enjoy renovating their houses by themselves; thus, they tend to be civil servants or people with more free time. They prize the village highly not only for its location and environment but also for its sense of vitality. While Quintigny emphasizes communication among residents within the area, it does not force it, reflecting Quintigny's characteristics.

キーワード：農村移住、人口回帰、ジュラ、カンティニ村、田園生活、住宅取得

Key words: rural migration, population retrogression, Jura, Quintigny, rural life, housing acquisition

Ⅰ はじめに

1. 研究の目的と背景

ヨーロッパ農村は、産業化による農村手工業の衰退、若年層の流出、人口の高齢化を背景とし、19世紀後半以降、大きな人口減少を経験してきた。とりわけ、第二次世界大戦後の復興期から1990年代にかけては、ヨーロッパ農村から最も人口が減少した時代とされる (Diry 2000)。しかし、西ヨーロッパでは1990年代頃より農村の人口が再び増加へと転じている。これは、住む場所としての農村の再評価に加え、都市における治安や騒音、環境汚染の問題化、中心部の地価高騰と郊外化の進展によって、都市からの農村への人口逆流が促進されたことが背景である (Woods 2011)。

フランスの農村移住に関する研究は、社会学者の Léger and Hervieu (1979) によるものが嚆矢である。彼らは1960年代末に始まったこの新しい動きを「自然への帰還 (Le retour à la nature)」運動と名付け、その多くが学生運動の挫折を契機に移住した若者であったことを明らかにした。その後、農村移住は若者のみならず幅広い年齢層へと拡大し、「新農村主義 (Le néo-ruralisme)」あるいは「農村再生 (renaissance rurale)」と形容され (Mercier and Simona 1983; Kayser 1990)、地理学や社会学で注目される現象となった¹⁾。とりわけ1990年代以降は、農村移住者の多様化が進展し、農村の人口回帰も様々な角度から研究されるようになった²⁾。これら既存研究は、人口統計を用いた研究と農村住民の語りを用いた研究の2つに大別される。

人口統計を用いた研究は、地理学を中心に蓄積されてきた。その主題は、1990年代以降の都市郊外化に伴う農村移住や山村アメニティを求めた農村移住である。主な研究として、都市・農村間における人口移動の生活圏に注目して分析したPistre (2011)、アルプス農村移住者を国籍別に比較検討したBender and Kanitscheider (2012)、農村のジェントリフィケーションと地方の再評価を統計分析したRaymond (2003)、人口希薄農村の人口回帰を分析したPistre (2016) などが挙げられる。これら研究は、人口動態を統計的に分析することを主眼としてきたため、具体的にどのような人々が何を背景として移住しているのが不透明であった。そのため、農村への人口回帰現象を把握するには、移住者の生活実態や意識をローカルな範囲で明らかにすることが必要となる (Bender and Kanitscheider 2012)。

一方、農村移住者をミクロに分析したものとしては、社会学を中心とした移住者の語りを用いた研究がある。これらが主題とするのは、農村の新住民と旧住民の対比 (Guimond and Simard 2011)、農村における芸術家や職工人あるいは農村起業家が地域に果たす役割 (Perrenoud 2008; Saleilles 2007)、「理想郷 (utopie)」としての農村の意味 (Léger 1979; Wittersheim 2017)あるいは「郷愁」を誘う場所としての農村 (Sallustio 2018)であった。しかし、移住者の語りを分析する研究では、人々の心理や内面に注目するあまり、農村移住者の属性や位置付けに関する検討が不足しており、また彼らの生活の具体像が不明瞭であるという問題があった。

よって、現代農村の人口回帰を捉えるには、農村住民の移住経緯や転居歴、職業等をまず把握し、移住者の特性を明らかにする必要がある。そして、彼らが農村生活で何を感じ、また農村の何を魅力と感じているのか、すなわち農村移住者の意識を分析することで、農村への人口回帰の条件が明らかになると考える。以上を踏まえ、本研究の目的は、農村への人口回帰が進むフランスにおいて、農村移住者の田園生活はどのようなものであり、その背景には何があるのかについて、彼らの意識に注目して明らかにすることである。

研究の手順は以下の通りである。まず、II章にて、農村移住の展開を人口と家屋の変動、住宅開発、土地

利用に注目して述べる。III章にて聞き取りおよびアンケート調査から得られた農村移住者のデータを、職業や移住の契機などから整理し、居住履歴から住宅取得へと至った移住者の特性を考察する。IV章にて農村移住者の意識、すなわち田園生活の良い点・悪い点、田園生活の条件、地域意識から、移住生活の具体像と農村移住者増加の背景を考察する。

2. 調査の概要

本研究の調査は、2017年の7月に行った。1980年代以降にカンティニ村に移住した居住者を「農村移住者」と定義し、彼らに質問票を配布し、記入後に回収を行なった。また、移住者のなかから複数名に聞き取り調査を実施した。そのほか、カンティニ村長や村人への聞き取り調査、土地および家屋の利用状況の調査を行なった。

II ジュラ県カンティニ村における農村移住の展開

1. カンティニ村の概要と人口増加

本研究が事例とするのは、フランスのジュラ山脈縁辺に位置するカンティニ村 (Quintigny) である (図1, 2)。カンティニ村は、フランス東部フランシュ・コンテ地域圏のジュラ県にあり、標高212 ~ 395 mの丘陵上に位置する静かな農村である。

INSEE (国立人口統計研究所) が定義する雇用圏 (zone d'emplois) をみると、カンティニ村はロン・

図1 研究対象地域
Fig. 1 Study area

図2 カンティニ村の空撮（出典：カンティニ村HPより）

Fig. 2 Aerial photo of Quintigny

図3 ジュラ県カンティニ村の人口と家屋数の変化 (1943～2017年)

資料：INSEE（フランス国立統計経済研究所）。

Fig. 3 Changes in the population and number of houses in Quintigny, 1943–2017

ル・ソニエ雇用圏に属している³⁾。カンティニ村は、ジュラ県庁所在地ロン・ル・ソニエの郊外に立地することから、通勤や通学、日常生活においてこの都市との結びつきが強い。また、ロン・ル・ソニエ雇用圏は、フランシュ・コンテ地域圏で最も人口密度が低く⁴⁾、高齢化の進行と若年人口の低下が最も顕著な地域である。よって、カンティニ村は人口減少地帯のなかで移住者の獲得に成功している村といえることができる。

カンティニ村の人口増減を図3に示した。カンティニ村は、フランスのなかでも農村の人口回帰が早く、1970年代中頃から人口減少が増加へと転じた。カン

ティニ村の人口増加数は、1975～1982年に39人、1982～1990年に21人、1990～1999年は22人と安定的に推移してきた⁵⁾。特に、2010年代からの増加は顕著であり、2017年の人口は262人（122戸）と1975年（129人）の2倍以上となった⁶⁾。家屋数の推移をみると、1975年に47戸であった住宅数は2013年には92戸と大きく増加したことがわかる（図3）。一方、住宅需要の増大に伴って、村内の別荘や空き家は徐々に減少し、代わって定住家屋の割合が上昇している。

カンティニ村の生産年齢人口は139人（15～64歳）であり、うち恒常的勤務者は108人（77.8%）である⁷⁾。恒常的勤務者の内訳は、会社員・従業員48人、中間管理職36人、ブルーカラー層24人、上級管理職・知識専門職8人、農業4人である。農家については恒常的勤務者としての農業者以外に兼業農業者や退職後に従事した農業者も存在し、彼らを含めたカンティニ村内の農家は4戸である。この4戸のうち専業農家は1戸でありチーズ加工用の生乳生産を営んでおり、残り3戸の兼業農家はワイン用ブドウの生産を行なっている。そのほか非生産年齢人口18人には、15歳以下の学生（6人）や退職者（12人）が含まれる。

2. カンティニ村の住宅計画と土地利用

カンティニ村における住宅開発は、広域圏とローカルのそれぞれを単位とする都市計画によって管理がされている。広域圏を単位とする都市計画は「ペイ・レドニアン地域土地協定」である⁸⁾。この土地協定は、フランスの国家政策である「広域整合スキーム」（Le Schéma de Cohérence Territoriale: 以後、SCOTとする）によるものであり、SCOTは都市圏や複数都市圏からなる地理的範囲を指定し、持続的な都市開発を目的とする地域計画である⁹⁾。SCOTは関係市町村の集合体である「公施設法人（établissement public de coopération intercommunale）」が中心となり、市民、事業者団体、地方公共団体の意見を取り入れながら策定される（ストゥルイユ 2012）。国、地域圏、県は、自ら参画を望む場合においてのみSCOTの策定に加わる。SCOTは、厳格な規制を強いるものではなく、都市計画の目標や方向性を定めるものである。該当地域のSCOTであるペイ・レドニアン地域土地協定は、中心都市ロン・ル・ソニエを核とし、82のコミュン（村）に

図4 ジュラ県カンティニ村における年代別住宅地と土地利用（2017年）

資料：現地調査およびカンティニ村提供資料。

Fig. 4 Residential areas and land use in Quintigny, 2017

によって構成され、それぞれのコミュニンは雇用や経済の中心性の高さから4段階に分類される。カンティニ村は最も下位の「農村的コミュニン」に位置付けられており、雇用やサービスの提供というよりも景観や遺産等を含め伝統的・美的景観価値を維持すべき村に位置付けられている。

一方、ローカルを単位とする都市計画は、コミュニンごとに策定される「地域都市計画プラン（PLU: Plan Local d'Urbanisme: 以後PLUとする）」である¹⁰⁾。PLUは、ローカルな自治体の土地利用と用途地域を制定する地区計画であり、SCOTの下位計画としてSCOTの方針に準拠している。PLUは地区開発に加えて、自然地域や農業地域の保護、環境のコントロールが目的とされ、カンティニ村のPLUでも住宅開発は、自然条件や景観、土地利用、文化遺産を考慮し、居住密度、壁面の色、屋根の角度、庭の植栽、家のデザイン等が村の伝統的景観に溶け込むことが求められる¹¹⁾。カンティニ村ではPLUが最も重要な地区開発計画であり、PLUの策定によって離農した農業者の農地や受け入れのための住宅地整理が実現し、移住者受け入れのための環境が整備された。

PLUに基づいて開発されたカンティニ村の住宅地

と土地利用を図4に示した。村内の居住区は、村を東西に縦断する道路に沿って分布する。なかでもその中核を成すのが、村の中心部から東部にかけて分布する歴史居住区である。この居住区は、1939年よりも前に建設された場所であり、とりわけカンティニ城¹²⁾の周囲の住居は築200年～300年になる。カンティニ城は国から歴史文化遺産の指定を受けているため、城の周囲に立地する歴史居住区は、明るい色彩の壁面に二つの煙突が設けられた赤い屋根の統一的な住居景観を保持している（図5）。また、歴史居住区の住居の高さは4～4.5 mであり、住居は区画内の30%以内に収められている¹³⁾。

一方、1940年以降の新しい住宅地は、歴史居住区に隣接する地区から西へと開発が進み、村の周辺部へと拡大してきた¹⁴⁾。新しい居住区は、農地を住宅地に転用したことから細長い地割形状が特徴であり、住居は区画内の15%以内に建てられているものが大半である（図6）。

2017年の時点で新たな住宅分譲地は約2.5 haがあり、1区画あたりの土地価格は3～5万ユーロである。土地の価格相場は、隣村よりも1区画あたり1～2万ユーロ安く、村内でも傾斜地にある眺望な良好な区画

図5 カンティニ村における古い農村家屋の住居
(2017年7月撮影)

Fig. 5 Old farmhouses in Quintigny

図7 カンティニ村の丘陵とブドウ畑 (2017年7月撮影)

Fig. 7 Hilly areas and vineyards in Quintigny

図6 カンティニ村の新居住区における農村移住者の家屋 (2017年7月撮影)

Fig. 6 Migrants' houses in Quintigny

が人気である¹⁵⁾。中古物件と土地が併せて売りに出される場合、約7万ユーロから20万ユーロが相場である¹⁶⁾。売りに出される土地や物件は全て私有であり、村役場が直接土地や物件を販売する事例はない。

土地と物件の売買手順にはいくつかのケースがある。一般的には、不動産屋が買い手に土地や物件の情報を紹介し、買い手は物件購入を決意したところで、交渉人を介して売り手から物件を購入する手順がとられる。そのほか口コミによって直接来訪するケースも多く、この場合買い手は役場の紹介や個人の物件情報をもとに自分で物件を探し、気に入った土地や建物を見つけたところで交渉人を介して購入・取得へと至ることとなる。しかし、2000年以降、カンティニ村では移住希望者が増加しているため、良好な生活環境を維持するために、移住者の受け入れはあと20戸程度

が限度とされている¹⁷⁾。

そのほか住宅地以外の土地利用では、ワイン用のブドウ畑や牧草地を中心とする農地(210 ha)のほか、森林(100 ha)が大きな面積を占めている(図7)。これら自然景観と農村景観は、居住者の住環境に対する魅力的な要素として重要な役割を果たしている。

III カンティニ村における農村移住者の特性

1. 農村移住者の基本属性

農村移住者の基本属性を表1(No 1～12)に示した。調査を行なった世帯の移住年は、1980～1990年代が5件(No 1～5)、2000年代以降が7件(No 6～12)である。農村移住者の年齢は、40～60歳代が69%(20人)と多く、いずれの家族も40歳代以上の世帯員を含んでいる¹⁸⁾。家族構成は、夫婦世帯が6戸(No 2, 3, 6, 9, 10, 12)、子供同居世帯が3戸(No 4, 5, 7)、単身世帯が3戸(No 1, 8, 11)である。

移住者の出身地は、59%(10人)がジュラ県、24%(4人)が隣県の出身であり、いずれもジュラ地方に土地勘がある人々といえる。一方、職業は行政や教育、病院等の公務員職(7人: 37%)が多いことが特徴である¹⁹⁾。移住者の住居は、すべて「購入」によるものであり、賃貸はない²⁰⁾。

移住者がカンティニ村を知った契機は、不動産仲介業が4件(No 2, 4, 11, 12)、偶然知ったものが2件(No 1, 9)である。一方、友人からの紹介を契機とす

表1 ジュラ県カンティニ村における農村移住者の基本属性 (2017年)

Table 1 Characteristics of rural migrants in Quintigny, 2017.

No	年齢	性別	職業	移住前の前職	出身地	居住様式	移住年	村を知った契機	カンティニ村に移住したきっかけ	カンティニ村の良いところ
1	68	男	退職者	公的機関	ジュラ県	購入	1981	偶然	ロン・ル・ソニエから通える場所だったから	静けさ、穏やかさ
2	61・58	男・女	養護教育指導士・主婦	養護教育指導士・看護師	ニエーブル県・ジュラ県	購入	1986	不動産仲介	ジュラ地域の職場から通える範囲で探していたため	住民が新住民に対して受け入れを歓迎していること。農村生活としての質が高いところ。
3	56・54	男・女	食肉業・役場秘書	食肉業・主婦	ソーヌ・エ・ロワール県・ルト・エ・モゼール県	購入	1986 (1985)	友人からの紹介	紹介してくれた友人は職場の同僚でもあり、彼とカーシェアで通勤できることが可能だったから。	治安が良い、購入可能な物件の存在とその価格、村民同士の良好関係
4	54・58	男・女	社会福祉施設経営・会社員	会社員・会社員	ジュラ県・ドゥー県	購入	1992	不動産仲介	通勤先のロン・ル・ソニエから15km圏内で探していた。子供が小さかったので田舎で子育てがしたかった。	都市に近接しながらも未だに農村地帯であり、また農村の生活リズムが残っている。居住地は果樹園や牧草地に囲まれ広々している。集落はとても静かで騒音もない。そして村の魅力を引き出す多くの活気あるコミュニティや組織がある。
5	58・54・22・19	男・女・男・女	原子力会社・公務員	原子力会社・公務員		購入	1996 (1993)		アパート生活が嫌で、いつか引越して田舎で生活するのが夢だった	職場であるシャロンから60kmくらいで、車で30分と通える範囲にあったから。気に入った石造りの農村家屋を見つけたから。
6	52・30・27・25・19	男・女・男・女・男・男	大工・サービス業勤務・エンジニア・金物職人・大学生・ギタリスト	大工・秘書	ドゥー県・ジュラ県	購入	2002	友人からの紹介	ロン・ル・ソニエから近いから、そんなに大きな自動車道が通っていないこと	住宅のための土地の存在とその価格、十分な広さの区画、村の雰囲気の良いこととその評判。新しい住民を歓迎する雰囲気がある。
7	50・19	男・女・男	工事現場			購入	2002			静かなところ、あまり世間に知られていないところ、お店がないところ
8	45・45・18・12	男・女・女・女	会社員・病院薬品ラボ	会社員・会社員	チュニジア・ロワール県	購入	2008	村を来訪して	子供が小さいうちに田舎に引越したかったから	村の規模が小さく自動車の通りがほとんどないこと、都市にも近い、村の景観が魅力的なところ
9	67	女	退職者	商店経営	ジュラ県	購入	2010	偶然		
10	53・51	男・女	市役所・測量士	工務店・農協	ジュラ県・ジュラ県	購入	2013	村を来訪して	購入した家に一目惚れした。カンティニ村に知り合いがいたこと、また彼らから良い評判を聞いていたため。	小道に家々が並ぶ景観が良い。一目で気に入った。
11	52・48	男・女	教員・技術者	教員・技術者	ジュラ県	購入	2013	村を来訪して、不動産仲介	職場からの地理的な近さ。庭を作り木々を植える十分な広さの土地があったから。	村が自動車道に面していないこと。村の大きさが大きすぎず小さすぎない。村内や村の周りを散歩するのに適していること。ロン・ル・ソニエ、プレランまで15分と近いこと。パン屋が近いこと。
12	67	男	退職者	会社経営	ジュラ県	購入	2013 (2010)	不動産仲介	ロン・ル・ソニエから近いこと。	村が静かで、よく管理されて手入れが行き届いているところ

注1:職業・前職の下線は公務員を示す。

資料:聞き取り調査およびアンケート調査。

注2:移住年の()内はリフォームを長期で行う世帯が移住前に住宅購入した年次。

注3:空欄はデータなし。

る2件 (No 3, 6) や実際に村を来訪した2件 (No 10, 11) は、移住前にカンティニ村を候補として積極的に考えていたといえる。

「カンティニ村に移住したきっかけ」と移住後に感じた「カンティニ村の良いところ」²¹⁾をみる。最も多い回答は「ロン・ル・ソニエに近いこと」(5件: No 1, 4, 6, 11, 12) である。これは、「職場から通える範囲」(4件: No 2, 4, 5, 11) と同様で多くが県庁所在地ロン・ル・ソニエで働いていることを示している。また、「移住したきっかけ」では、「子供が小さいうちに田舎で引越し・子育てがしたい」(No 4, 8) あるいは「いつか田舎で生活するのが夢だった」(No 5) というように、農村の環境や魅力が回答された。また、「友人がいた」(No 3, 10) あるいは「友人から良い評判を聞いていた」(No 10) というようなカンティニ村住人との繋がりもあった。

「カンティニ村の良いところ」では、「静かであるこ

と・静けさ」(No 1, 4, 7, 12) が多く挙げられた。これは、「村内を自動車が通らない・通りに面していない」(No 8, 11), 「村に店がなく、世間にも村の存在が知られていない」(No 7), あるいは「村の規模が程よく小さい」(No 8, 11) ことが背景といえる。そのほか、「村の景観が良い・家々の景観が魅力的」(No 8, 10), 「村の雰囲気」や「村民同士の良好関係・新住民に対して受け入れを歓迎していること」(No 3, 6) 「活気あるコミュニティや組織」(No 4) など、環境要素と人的資源も魅力とされた。一方、「都市に近接しながら未だに農村地帯であり、また農村の生活リズムが残っている」(No 4), 「農村生活としての質が高い」(No 2), 「気に入った農村家屋を購入できた」(No 5, 10) というような、「農村」としての魅力も移住者は高く評価している。

図8 ジュラ県カンティニ村への移住者の転居移動歴（2017年）

Fig. 8 Moving history of migrants in Quintigny, Jura 2017

資料：聞き取り調査およびアンケート調査。

注：図中の数字は表1と符合。

2. 移住者の転居移動歴

カンティニ村への移住者の転居移動歴を図8に示した。移住者の多くは、ジュラ県とその隣県の出身であるが、カンティニ村に移住するまでは様々な転居を経験している。

転居移動歴が判明した移住者のうち、ジュラ県外への転居を経験しているものは10名（67%）である。県外への転居は、隣県のドゥー県、コート・ドール県がそれぞれ2名であり、そのほか6名は北フランスから南仏まで広くフランス国内を経由している。

転居移動歴の特徴は2点あり、1点目は都市を経由する転居移動である。経由される都市は、隣県の県庁所在地ブザンソンやディジョンのほか、南仏のアヴィニオンやペルピニャンなど人口10～15万人規模の都市である。いずれの移住者も比較的若年の時期に都市への転居を経験していることから、就学や就職、結婚が転居の理由と考えられる。

2点目の特徴は、カンティニ村への移住の前に、ロン・ル・ソニエとその近郊に転居をしていることである。カンティニ村へと直接移住した者が少ないのは、就職や転職を契機にロン・ル・ソニエやその近郊に一度転居をし、結婚や出産を契機により良い住宅環境を求めてカンティニ村へ移住した経緯があるためである。このことは、カンティニ村の存在が、ローカルな住宅情報や口コミからしか手に入らないことも示している。

3. 農村家屋の自主リフォーム

カンティニ村への移住者の特徴に、農村家屋の自主リフォームがある²²⁾。移住者の大半は、住宅の取得時に何かしらの自主リフォームを行っており、なかにはリフォームのために数年かけて移住するものもある(No 3, 5, 12)。

図9に移住者によるリフォームの例を示した。事例

図9 カンティニ村の移住者による自主リフォーム（2017年8月撮影）

注：リフォーム前の写真は居住者より提供。

Fig. 9 Home renovations of migrants in Quintigny.

1は、内装のみならず外装や増築を伴う自主リフォームである。事例1は住宅を1993年に取得し、近隣に家を賃貸しながら週末を利用して約3年をかけて工事を行った。増築工事では、屋内プールの設置や地下室の整備なども含まれ、全て自ら行なったという。

事例2は、親族の死後に住宅を相続したのを契機に、ロン・ル・ソニエに居住しながら内装のリフォームを行った例である。事例2の家主は、カンティニ村近隣に友人等が多いため、作業の一部は相互に手伝い、勤務後や週末を利用して数年かけてリフォームしたという。

このように、日中に勤務がある移住者の場合、自主リフォームをするためには、時間に余裕のある職業であることが条件となる。カンティニ村の移住者に行政や教育、医療等の職種が多いのは、公務員職が年休や有給休暇が多く、定時で仕事が終わるため、リフォームに充てる時間があるためである。そのほか、金銭的に余裕のある移住者は、リフォームを外部の業者に委託する、あるいはリフォーム済みの割高な物件を購入

することもある。

IV 農村移住者と田園生活への意識

本研究では、農村への人口回帰の背景や移住者の定着を可能にする条件を明らかにするために、農村移住者の田園生活への意識として、以下の3点のデータを収集した。それらは、移住者が実際に生活を始めて感じた「田園生活の良い点・悪い点」（表2）、また農村移住を定着させるために必要な「移住者が考える田園生活の条件」（表3）、そして農村での人間関係に関わる「移住者の地域意識」（表4）である。

1. 田園生活の良い点・悪い点

「田園生活の良い点・悪い点」（表2）をみる。まず、「良い点」として挙げられたのは、「静けさ・静寂」（No 1, 9, 10）である。これは、「騒がしい都市住民や彼らの職場から離れていること」（No 5）、「都会の騒音、汚染、人混みがないこと」（No 2）といった

表2 カンティニ村移住者の田園生活の良い点・悪い点 (2017年)
Table 2 Advantages and disadvantages of rural life cited by migrants in Quintigny, 2017

分類	内容
良い点	■農村部に居住することは、我々の好きなものを満たしてくれる(No6)。■静けさ・静寂(No1, 9, 10)。■自然の空間、農村生活の質(No1)。■農村の生活スタイル(No12)。●近隣住民との繋がりが(No9)。●日々の生活において、より人との距離が近く、協力し、助け合うことができる(No4)。●隣人と仲良くでき、話したりできること。他人を尊重できること(No10)。●メリットしか感じていない。デメリットがある場合は移住する前に考えるべきである(No7)。▲都市への移動も住民同士の連携で解決可能なこと(No2)。▲騒がしい都市住民や彼らの職場から離れていること(No5)。▲都会の騒音、汚染、人混みがないこと(No2)。
悪い点	▲スポーツ施設や映画館がなく、車移動が必須であること(No9)。▲買い物や普段の生活で不便をすることがある(No12)。▲何かと外へと出かける必要があること(No12)。▲子供の通学が大変・子供が都市まで行かないと学校、スポーツ、文化活動ができない(No1, 4, 9, 12)。▲都市とを繋ぐ公共交通機関がないこと(No5, 12)。▲道路やインフラ、インターネット等々にみるアクセスの不便さ(No1)。

注) 表中の番号 (No) は表1の番号と符合する。

■: 自然要素 ●: 人文要素 ▲: 地理的要素

表3 カンティニ村の移住者が考える田園生活の条件 (2017年)
Table 3 Conditions of rural life of migrants in Quintigny, 2017

分類	内容
都市との関係	都市から離れ過ぎない場所にあること(No3)。パン屋や野菜など食料品店が近接すること、土地の価格、村の中心部に近い場所に住宅地整備がされてること(No10)。アクセス可能な職場があること(No8)。地方の都市と近接する場所その村があること(No2)。引越しする際に、村と街を結ぶ移動方法や時間についてよく考えておくこと(No5)。
居住地	移動手段(車、バイク)を有すること(No1, 5~7, 9)。農村の住宅区画に十分な広さを持たせるため、土地を細分化しないこと(No3)。自然や静けさが好きで、店や文化施設が無いことに逆に価値を置けること(No2)。村がベッドタウンのようにならないこと(No3)。様々な用事は一つにまとめて村と街の往復を少なくすることが重要(No5)。様々な用事は一つにまとめて村と街の往復を少なくすることが重要(No5)。
地域と人	農村は都会の文化的なものの遠過ぎてはならない(No6)。互いに共生できること(No6)。自身が自立した存在であること(No7)。活発で充実した社会関係とその雰囲気を持続するために、ローカルな地域生活の中に身を投じること・過度に個人的な生き方をしないこと(No1)

注) 表中の番号 (No) は表1の番号と符合する。

資料: 聞き取り調査およびアンケート調査。

要素とも同義である。また、「農村に居住することは、我々の好きなものを満たしてくれる」(No 6)という意見にあるように、「農村生活の質・農村の生活スタイル」(No 1, 12)も重要である。一方、人的要素として、「近隣住民との繋がりがや会話。協力や助け合い」(No 4, 9, 12)が挙げられ、「人との距離が近い」(No 4)ことで「隣人と仲良くでき、他人を尊重できる」(No 10)ことが重視された。

田園生活の「悪い点」は、「特になし」とした住民が多かったが、回答に挙げたのはいずれも地理的要素である。特に、「子供の通学、スポーツ、文化活動は都市まで行かなければならない」(No 1, 4, 9, 12)という点が多く、カンティニ村には「スポーツ施設や映画館がなく」(No 9)「買い物や普段の生活で不便・何かと外に出かける必要がある」(No 12)ことが挙げられた。彼らは、都市から離れた環境に身を置くことに価値を見出す一方で、一部の移住者は「文化施設や公

共交通機関が無いこと」(No 5, 9, 12)、「道路やネット環境」(No 1)に不便さを感じていた。

2. 移住者が考える田園生活の条件

カンティニ村の移住者が考える「田園生活の条件」を示した(表3)。彼らの意見は、「都市との関係」、「居住地」、「地域と人」の3つの条件に整理される。

「都市との関係」で最も多かった条件は、「移動手段を有すること」(No 1, 5~7, 9)である。村内にはパン屋や食料品店がないことから、とりわけ自動車を保有しないと日常生活が困難であることがわかる。そのため、「村内に店や文化施設がないことに逆に価値が置けること」(No 2)が重要となる。これに関連し、「都市から離れすぎないこと・地方都市との近接性」(No 2, 3)という地理的条件や、「都会の文化的なものから遠すぎないこと」(No 6)というように、都市との関係性を一定に保つことも意識された。

一方、「居住地」としての条件は、「広々とした住宅地を保つため、土地を細分化しないこと」(No 3), 「自然や静寂が好きであること」(No 2), 「村がベッドタウン化しないこと」(No 3), というように、居住地としての環境維持が挙げられた。また、「パン屋や野菜など食料品店が近接すること」(No 10), 「アクセス可能な職場があること」(No 8), 「村の中心部に住宅地があること」(No 10) というように、居住地の立地条件も重要とされた。

「地域と人」の条件は、「過度に個人的な生き方」(No 1) をせずに、「ローカルな地域生活に身を投じ」(No 1), 「互いに共生」(No 6) することで、「活発で充実した社会関係とその雰囲気を持続する」(No 1) ことが求められていた。一方で、「自分自身が自立した存在であること」(No 7) というように、地域に依存しすぎないことも意識されていた。

3. 移住者の地域意識

移住者の「地域と人」に対する意識を細かく検討したのが、表4の「移住者の地域意識」である。この「移住者の地域意識」でまず目立つのは、コミュニ

表4 カンティニ村の移住者の地域意識 (2017年)
Table 4 Migrant's opinions of the community in Quintigny, 2017

No	意識の内容
1	コミュニティはとても良く、活気のある村である
2	様々な活動は村の活気を再び取り戻しており、「ラ・グループ・ドール(La grappe d'or)」はその典型だと思う。
3	村人たちは、村がベッドタウンのようにならないように、環境の水準を保つために協力している。また非常に活発なコミュニティ組織とそれを支える村議会の活動も貢献している。
4	村の小学校の閉校を契機に住民組織「ラ・グループ・ドール」が設立された。こうした善意ある世代は、我々の村が「共に生きる」ために、極めて重要である。それは村人が集う幾多の組織よりも重要である。
5	活発であるのは知っているが、活動やイベントには特に必要性を感じないため一切関わらないことにしている。
6	コミュニティが活動的であり、また村役場は住民の要望をよく聞き入れており、ベッドタウン化していない。
7	カンティニ村はとても活気がある
8	村は小さいが活動が盛んで活気があり、多くの篤志活動に基づいている
9	多くのコミュニティの活動をやっているのを知っているが、自分は人見知りなので参加したことがない
10	村議会が新住民の受け入れを中心に非常に意欲的である。また、村長の尽力や「ラ・グループ・ドール」の代表者が非常に熱意を持っていることが村にとって重要。
11	協力する良い精神を持った、非常に活発で村に活気をもたらす取り組みがある。
12	とても活気がある村である。多様な活動があり、人口の増加に寄与している

資料：聞き取り調査およびアンケート調査。

ティとその活動に対する言及である。とりわけ、「活気がある」または「活動的である」という回答が多数にみられた。具体的には、「コミュニティがとても良く、活気のある村である」(No 1), 「とても活気がある村であり、多様な活動によって人口の増加に寄与している」(No 12), 「村は小さいが活動が盛んで活気があり、多くの篤志活動に基づいている」(No 8) とされ、移住者はカンティニ村の「活気」を魅力に捉えていた。

こうしたカンティニ村の活気は、住民組織「ラ・グループ・ドール (La grappe d'or)」の貢献が大きい (No 2, 4, 10)。「ラ・グループ・ドール」は2004年に設立された団体であり、新住民を含めた村民の交流、村のあらゆる活動の中心を担うボランティア組織である²³⁾。とりわけ、村民による演劇、蚤の市、共同でのワイン収穫、頻繁に行われる食事会、屋外イベント等、村の活動への貢献が住民に評価されていた。このように村が活発であることは、「村がベッドタウンにならないため」(No 3) にも重要である。そのほか、村への貢献では「村役場・村議会・村長」(No 3, 6, 10) が挙げられ、なかでも長く任期を務めている「村長の役割」が高く評価されていた。

一方で、「多くのコミュニティの活動をやっているのを知っているが、自分は人見知りなので参加したことがない」(No 9), 「活発であるのは知っているが、活動やイベントには特に必要性を感じないため一切関わらないことにしている」(No 5) という住民も存在した。これに対し、カンティニ村は、村の活動や組織への参加、コミュニティへの関与は個人の自由であり、村社会の枠組みで参加を強制されるものではないとしていた。この点は、カンティニ村における移住者にとって雰囲気の良さを感じる要素の一つであり、また移住への心理的障壁を低くする役割も持っている。

V おわりに

本研究は、フランス・ジュラ農村を事例に、移住者の田園生活の実態と農村への人口回帰の背景について、移住者の特性や意識に注目して論じた。

ジュラ県カンティニ村は、フランス国内でも早くから農村への人口回帰が始まり、1970年代以降から

2017年にかけて人口が2倍以上に増加した。人口回帰の背景には、ロン・ル・ソニエ雇用圏の拡大と郊外化があり、通勤や通学、日常生活における都市・農村関係が影響していた。また、カンティニ村への移住者は、古い農村家屋の自主リフォームを好み、公務員職など時間に余裕がある人々が週末や勤務後を利用してリフォームを行っていた。

カンティニ村への移住者は、都市の喧騒から離れた静かな環境や安価な土地価格、美しい景観や伝統的な古い農村家屋、そして村の活気を高く評価していた。また、田園生活が成り立つ条件として、都市との適度な近接性、居住地としての環境を維持する計画的な住宅開発、住民組織や村行政に関わる人的資源を挙げている。

カンティニ村は、居住者を受け入れ、旧住民と新住民の円滑な交流を促進する一方、コミュニティへの参加や交流は個人の選択としていた。こうした移住者に対する地域への参画や関与を強制しないことが、自由で開放的な村の雰囲気を作り出したといえる。本研究では、近年増加している若年の子育て世代への聞き取り調査が不足していた。この点は今後の課題とした。

謝 辞

調査にあたって、カンティニ村長のYves Moine氏には、多くの便宜を図っていただいた。また、カンティニ村の人々には多大なご協力をいただいた。記して厚く感謝申し上げる。本稿の骨子は、2018年日本地理学会春季学術大会（於：東京学芸大学）にて発表した。本研究は、平成29年度科学研究費補助金、特別研究員奨励費：課題番号16K16952（研究代表者：市川康夫）、基盤研究（A）：課題番号16H01963（研究代表者：小島泰雄）の一部を使用した。

注

- 1) フランスの農村の人口回帰を経年的に整理すると、以下の3期になる。それは、パリ五月革命を発端とする左翼思想に基づく中産階級の若者たちの農村移住が起きた「第1期（1968年～1970年代中頃）」、自然との親和や有機農業などエコロジー思想を有する人々の移住やオイルショックに

よる失業者の移住が起きた「第2期（1970年代後半～1980年代）」、都市化の進展により中流階級の子育て世代の農村移住が増加した「第3期（1990年代～）」である（Bonini and Clavairolle, 2008; Rouvière 2015; 市川 2018）。

- 2) フランスでは、農村への移住者は「ネオルール（néo-ruraux）」と表現されている。ネオルールとは「新農村住民」という意味だけではなく、社会・文化的背景を反映しながら時代ごとに意味を変化させながら用いられてきた。この内容は、市川（2018）に詳しい。本稿では、「農村」を字義通りの意味で用い、都市生活者の憧れや理想を含む場合を「田園」とした。また、農村への移住による人口増加現象を「農村への人口回帰」と表現する。
- 3) INSEEによると、雇用圏は「居住者や雇用者の活動の大半が完結し、そして労働供給に対して労働力の大半が満たされている地理的範囲」とされる。また、ロン・ル・ソニエ雇用圏の人口密度は48人/km²と地域圏平均72人/km²よりも大きく下回る。
- 4) 全国的に農村への人口移動が顕著となった1999～2009年では、ジュラ県の人口増加が4.1%なのに対し、カンティニ村の人口増加は10.9%である。
- 5) カンティニ村の推計では、2027年までに152件まで世帯が増加すると見積もられている。また、統計にはカンティニ村の居住者が、結婚を契機に新たに村内に住居を構える場合や、親から独立して住居を構える場合も統計に入っている。村内で生まれた若者は、村内に留まることを希望するものも多い。
- 6) 2013年の国立人口統計研究所のデータによる。
- 7) カンティニ村に小売店を構える者は少なく、唯一あるのはシードル屋とワイン工場の直売のみである。カンティニ村には2件のワイン工場があり、それぞれ10名前後が雇用されている。ワイン工場では、関係性が近すぎる村内住民よりも隣村や近隣地域などから雇用がされているという。
- 8) 地域単位「ペイ（pays）」を範囲とするペイ・レドニアンは、6つのコミューン連合で組織され、

- 人口規模は約5.6万人である。SCOTでは、地域全体の土地のうち、3分の2は1 haあたり最大10戸までの住宅のみ建築可能とされており、残りの3分の1には規制がない。
- 9) SCOTの前身は「基本計画 (schéma directeur: SD)」と呼ばれる国家制度であり、SDは都市圏の拡大に基づいていた。しかし、SDによるトップダウン方式や都市拡大志向に代わって、地方分権主体に基づくより持続的な開発が求められたことで、SCOTへと制度が変化した。しかし、依然として国家はSCOTに対して策定過程における監視・点検、そして策定後の承認を行う権限を有しており、国家による介入は大きい。一方SCOTの区域指定は、地域に委ねられている。
- 10) PLUでは、村内の詳細な土地情報や測量に基づく地図の作成が義務付けられており、この計画図がないと建設許可が下りない。
- 11) 地域都市計画プラン (PLU) は、自治体への負担ともなることからフランス全てのコミューンで実施されているわけではない。カンティニ村は、周辺の5つのコミューンとともに2010年にPLUを策定した。
- 12) 1987年に国の歴史記念物 (フランスの文化遺産保護制度: Monument historique) に登録された。そのほか、考古学的価値のある遺産として、墓地や風車小屋、古い住宅が登録されている。
- 13) 高さ制限や建ぺい率は、PLUやSCOTによる規制はないが、建築の際は環境や景観を考慮して概ねこれらに準拠して計画がされる。
- 14) カンティニ村はジュラ県でもインフラ整備に遅れてきた。例えば、下水道工事が近隣農村で1980年代に行われたのに対し、カンティニ村の工事は2012年であった。
- 15) 隣村のリュッフェ村では住宅地にする土地がなく、同じく隣村のレ・エトワール村では土地はあるが住宅地として供給するには面積が狭いのが現状である。
- 16) 売りに出される土地はかつて農地であった場所や空き家となった敷地などである。いずれも所有者は元農家だけではなく様々な人の所有となる。
- 17) カンティニ村長への聞き取りによる。また、移住者は絶えず定着しているため、移住者受け入れへの積極的な宣伝は行っていないという。
- 18) 割合 (%) は、調査で判明したものを母数としている。近年の移住者は、30歳代の子育て世代も多い。
- 19) フランスはヨーロッパでも人口当たりの公務員職の割合が高い国家である。日本とは異なり医療などに関わる仕事も多くは公務員に分類される。
- 20) カンティニ村長への聞き取りによると、住民の大半は持ち家であり、賃貸は4世帯 (4.7%) のみである。
- 21) 表1の「移住をしたきっかけ」と「カンティニ村の良いところ」には若干の意見の重複があるが、質問に対する回答者の意見を尊重し、同じような回答であっても移住者が答えた方のカテゴリに含めてある。
- 22) フランスでは、住居を自主リフォームすることが文化として根付いており、またリフォームそのものが楽しみとして捉えられている。そのため国民のリフォームへの関心は高く、テレビ番組や書籍で多く取り上げられるほか、リフォームに必要となるホームセンターも全国に数多く立地している。
- 23) 聞き取り調査によると「ラ・グラップ・ドール (La grappe d'or)」に会費を納めて参加している住民はおおよそ村民の約半分であり、フランスの一般的な農村よりも活動は活発でまた参加割合が高いという。

文 献

- 市川康夫 2018. フランス田園回帰にみるネオルール現象の展開と現在. 農業と経済84(9): 47-53.
- ジャン・フランソワ・ストゥルイユ 2012. フランスにおける戦略的都市. 計画の変容——広域整合スキーム (SCOT) の場合. 新世代法政策学研究14: 185-219.
- Bender, O. and Kanitscheider, S. 2012. New immigration into the European Alps: Emerging research issues. *Mountain Research and Development* 32: 235-241.
- Bonini, N., and Clavairolle, F. 2008. Installations en Cévennes: l'espace comme enjeu, *Espaces de vie, espaces-enjeux: entre investissements ordinaires et mobilisations politiques* 2008: 1-12.
- Diry, J. P. 2000. *Campagnes d'Europe——Des espaces en mutation*. La documentation Française.

- Guimond, L. and Simard, M. 2011. Les néo-ruraux et les ruraux de longue date sont-ils si différents au Québec ? Analyse de leur mobilité, sens des lieux et engagement. *Canadian Journal of Regional Science/Revue canadienne des Sciences Régionales* 34(4): 151–163.
- Kayser, B. 1990. *La renaissance rurale. Sociologie des campagnes du monde occidental*, Paris: Armand Colin.
- Léger, D. 1979. Les utopies du “retour”. In: *Actes de la recherche en sciences sociales*. Vol. 29, septembre 1979. Les classesenjeux. 45–63.
- Léger, D. and Hervieu, B. 1979. *Le retour à la nature: Au fond de la forêt...* L'Etat, Paris: Seuil.
- Mercier, C., and Simona, G. 1983. Le néo-ruralisme: Nouvelles approches pour un phénomène nouveau. *Revue de Géographie Alpine* 71(3): 253–265.
- Perrenoud, M. 2008. Les artisans de la « gentrification rurale »: trois manières d'être maçon dans les Hautes-Corbières. *Sociétés contemporaines* 71: 95–115.
- Pistre, P. 2011. Migrations résidentielles et nouveaux démographiques des campagnes françaises métropolitaines *Espace, Population, Société* 3: 539–555.
- Rouvière, C. 2015. *Retourner à la terre. L'utopie néo-rurale en Ardèche depuis les années 1960*. Rennes: Presses universitaires de Rennes.
- Salleilles, S. 2007. L'entrepreneur néo-rural et son réseau personnel: Une étude exploratoire [thèse]. Gestion et management. Université Montpellier I.
- Sallustio, M. 2018. Le « retour à la terre »: Entre utopie et nostalgie Le cas des collectifs de néo-paysans en France. *Conserveries Mémoires* 22. <http://journals.openedition.org/cm/2910>
- Wittersheim, É. 2017 : Filmer l'utopie. Retour sur “Allers-Retours à la Terre”. *Études rurales* 199: 91–110.
- Woods, M. 2011. *Rural*, Oxford: Routledge. ウッズ, M. 著, 高柳長直・中川秀一監訳2018. 『ルーラル: 農村とは何か』農林統計出版.

〈著者略歴〉

市川 康夫 (いちかわ やすお)

1984年長野県生まれ。博士(理学)(筑波大)。現在、埼玉大学教養学部・准教授。農業・農村地理学、フランス地域研究を専門とする。

中川 秀一 (なかがわ しゅういち)

明治大学商学部・教授。農村地理学・地域資源管理論、特に山村地域における森林管理を中心に研究を進めている。

小川 G. フロランス

明治大学商学部・元教授。日本研究・ジャパノロジー。専門分野は、日仏比較文学、仏語・仏文学、旅行文学、比較文化(日仏)。